News and Topics

新型インフルエンザ国内初発例に遭遇して

1．新型インフルエンザ発生時の初期対応

本年 5 月 15 日夜遅く，隣接する神戸市環境保健研究所から当院へドライアイスの有無の問い合わせがあった．理由を尋ねるとブタインフルエンザ H1N1 が PCR で陽性の検体があり，確認のため国立感染症研究所へ送りたいとのことであった．この時点でわれわれは新型インフルエンザ国内初発例の発生を感知したこととなった．当直明けでワインを飲みもうそろそろ寝ようかと思っていた小生に電話があったのが 15 日午後 11 時頃であった．12 時に病院へ到着し，感染管理室および新型インフルエンザ対策本部のコアメンバーが招集された．感染管理室の林医師が神戸市保健所に陣どり，小生は病院に居座り連絡をとりながら患者搬送を待ち受けた．16 日午前 1 時 15 分最初の患者が搬送されてきた．小生は 6 階北病棟にある感染症病棟から 1 階のほうをみていた．防疫車が到着したとたん報道陣のカメラのフラッシュが赤々と光った．患者はすでにリレンザが開始されていたためか全身状態良好であった．この頃，保健所では同様の症状を訴える高校生が 10 名以上いるという情報を得ていた．明け方までにさらに 2 人が入院してきたがいずれも重症感はなかった．午前 8 時には病院長も出席して対策本部会議が開催された．そこでは 12 時にプレハブでの発熱外来を開始すること，11 階北病棟を空床として看護師を発熱外来担当とすること，救急外来は三次救急のみとすることなどが決められた．その後 PCR 結果待ちの患者

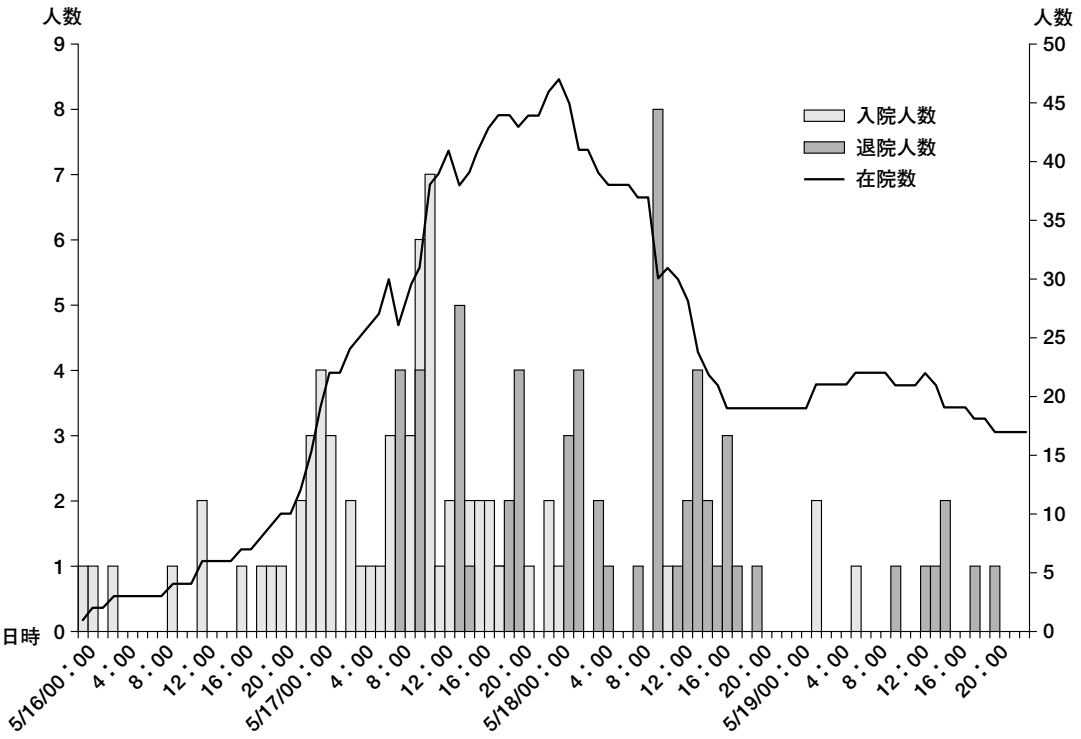

図 1　5/16〜5/20　新型インフルエンザ患者の入退院推移

図 2　新型インフルエンザ対策本部
4 月 28 日　12 時立ち上げ

図 3　発熱外来用プレハブハウス

を含め入院患者は急激に増加し，17 日夜には入院患者が 51 名となった（**図 1**）．それ以上の入院受け入れは困難と判断し，入院患者の病状がそれほど重症でなかったことから，神戸市保健所，保健福祉局を通じて厚生労働省へ自宅療養の可否を相談した．その結果 18 日 0 時から軽症者は退院し自宅療養可能となった．ただし自宅療養の患者には毎日内科医が電話で病状の確認を行った．

以上が初発例入院から 2 日間の初期対応である．

2．当院での準備状況

われわれがマニュアルのなかで準備していたことは，① WHO がフェーズ 4 を宣言すれば，院内に病院長を本部長とする新型インフルエンザ対策本部を立ち上げること，② 同時に発熱外来用のプレハブを発注すること，③ 6 階北感染症病棟が満床になる事態に備え，同じ非常エレベーターが利用可能で，患者移送時動線分離可能な 11 階北病棟を空床とし，入院ベッドを確保すると同時にマンパワーを確保すること，などであった．その他 2008 年秋から神戸市保健所，神戸大学病院感染制御部，西神戸医療センターなどと勉強会を開き，新型インフルエンザ患者発生時の患者受け入れ順序などをあらかじめ決めておいたことも今回の初期対応に役立った．

実際当院では WHO がフェーズ 4 を宣言した 4 月 27 日にプレハブを発注し，28 日に新型インフルエンザ対策本部（**図 2**）を立ち上げていた．また 30 日にはゴールデンウイーク中の発生に備えて医師の出務，配置が具体的に決められた．プレハブは 5 月 5 日に完成し（**図 3**），患者収容前日の 15 日にシミュレーションを行った．このことに関しては幸運であったというか，危機一髪というか，きわどい思いであった．またこの間 5 月 2 日を最初に蔓延国からの帰国者のいわゆる疑似症例を 5 例経験し，いずれも PCR 陰性であったが患者を感染症病棟へ収容する訓練にはなった．

3．発熱外来

プレハブでの発熱外来開始とともに保健所の発熱相談センターを経由したものだけでなく，直接来院する患者を含め受診者は増加し，5 月 19 日には最大の 78 人が受診した（**図 4**）．そのなかに 4 カ月児で大泉門膨隆患児がいた．通常の診療の場では何でもないことが発熱外来のなかでは思うような診療が困難であることを実感した．発熱外来の診療には外

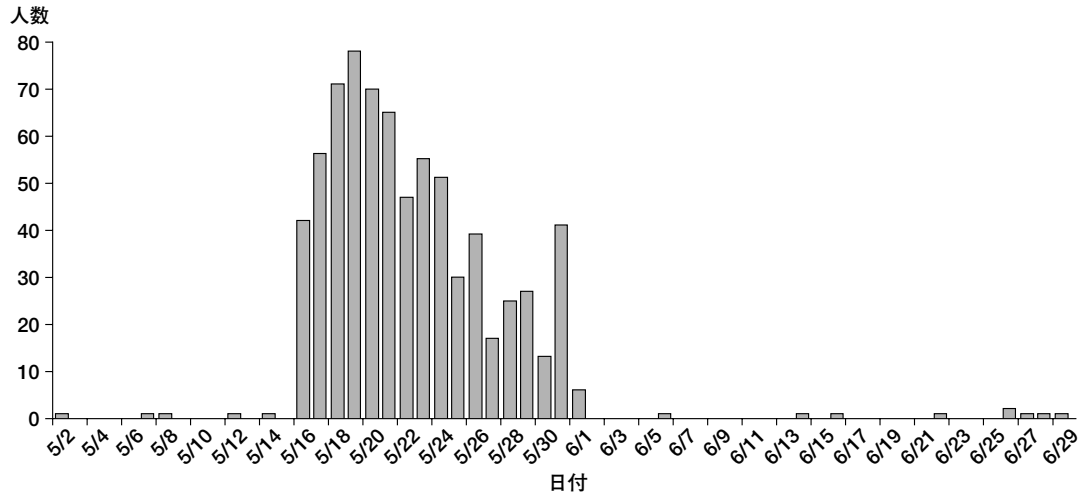

図 4　発熱外来患者数　最高 78 人（5 月 19 日）

科系医師が担当したが最も多い小児患者は小児科医が担当せざるを得ず，しかも小児科以外の後期研修医は通常の入院患者の診療にあたっていたが，小児科では後期研修医も含めて全員で発熱外来診療に従事した．

4．現場からの提言

多数の患者が殺到するなかで現場からは先に述べた軽症患者の自宅療養の件，PPE を空気感染対策から飛沫感染対策へ変更する件，症例定義を変更し発熱外来を縮小する，などを提言した．後日，舛添厚生労働大臣が視察に訪れた際は現場の意見を大切にしたいとの発言があった．

以上われわれが経験したなかから今後の対策に少しでも役立つことがあれば幸いである．

春田恒和
（神戸市立医療センター中央市民病院　小児科・感染症科）